サンスクリット語文法ノート(3)

第Ⅲ類動詞のアクセントと分詞

松浦　高志

1　はじめに

júhvatas (: hu-)「献供しつつある（彼らは）」（MS I.8.1: 115.4）のように，第 III 類動詞の現在分詞は曲用に際してアクセントの移動と分詞接辞の階梯の変化を伴わないのに対して，それ以外の第二種活用では変化を伴う．これはそれぞれの直説法能動態 3 人称複数形と対応することから，何らかの関係がある可能性がある．

2　第二種活用の分詞語幹

第二種活用（第 II, III, V, VII, VIII, IX 類）の代表的な動詞と強意動詞（intensive）の活用の一部と分詞語幹を示すと表 1 のようになる．分詞語幹は直説法能動態 3 人称複数の語尾から i を落とすことによって得られ，第 III 類は分詞接辞として常に -at- を用いる[1]．第一種活用については省略した．

3　不変化語幹を用いる分詞

不変化語幹 -at- を用いる分詞，または分詞に由来する形容詞は以下の通りである．

[1] *VGS* §156 (pp. 180–181), §85.b (p. 63).

表 1　第二種活用一覧

類	語根	意味	3 人称単	1 人称複	3 人称複	分詞
II	√i	go	é-ti	i-más(i)	y-ánti	y-ánt-
V	√kr̥	make	kr̥-nó-ti	kr̥ṇ-más(i)	kr̥-ṇ-v-ánti	kr̥-ṇ-v-ánt-
VII	√yuj	join	yu-ná-k-ti	yu-ñ-j-más	yu-ñ-j-ánti	yu-ñ-j-ánt-
VIII	√kr̥	make	kar-ó-ti	kur-más	kur-v-ánti	kur-v-ánt-
IX	√grabh	seize	gr̥bh-ṇā́-ti	gr̥bh-ṇī-más(i)	gr̥bh-ṇ-ánti	gr̥bh-ṇ-ánt-
III	*√bhr̥*	*bear*	*bí-bhar-ti*	*bi-bhr̥-más(i)*	*bí-bhr-ati*	*bí-bhr-at-*
int.	√nij	wash	né-nek-ti	ne-nij-más	né-nij-ati	(né-nij-at-)

(1) 第 III 類.

(2) 強意動詞.

(3) 第 III 類の現在分詞が形容詞として用いられるようになったもの.

(4) 第 II 類のうち，アクセントが語根固定型になるもの.

(5) s アオリスト：dákṣ-at- / dhákṣ-at-（√dah「焼く」）[2]

まず，(3)について，たとえば√gā の現在形は jígāti「彼は行く」（第 III 類）であるが，この古い分詞に由来すると考えられる形容詞 jág-at-「動く」や，これが名詞化した jág-at (n.)「（動くもののいる）世界」がある（強意動詞の分詞とも考えられる）.

次に(2)について，第 II 類のうち，√śās (< *k̂es-)「指示する」は命令法 3 人称複数で śā́satu（†śāsántu ではなく）になり，分詞は śā́s-at- になる．同様に√dāś (< *dek̂-)「崇める」の分詞は dā́ś-at- になる[3]．また，もともとこ

---

[2] *VGS* §527 (p. 381).

[3] *VGS* §450.3 (p. 336), §§454–455 (p. 339).　これらは Narten 型現在と呼ばれることがある．Narten, „Proterodynamischen“, 14–15 と Anm. 33, 43 を見よ．また Beekes, *Introduction*², 272–273 に簡潔にまとめられている．

れらと似た活用を行っていたと考えられる動詞もある．たとえば√stu (1)「讃える」は第 II 類で stáuti / stuvánti となるが，3 人称複数はもともと *stávati，分詞は*stávat- であった可能性がある[4].

4　第 III 類の活用の原型

4.1 重複

第 III 類の重複には三種類ある．

i 重複　bí-bhar-ti「運ぶ」，pí-par-ti「通過する」など．

a 重複　dá-dhā-ti「置く」，dá-dā-ti「与える」など（a は印欧祖語の *e に由来）．

u 重複　ju-hó-ti「献供する」，yu-yó-ti「分ける」など．

u 重複は語根に u が含まれる場合に限るから，類推によって作られたものと考えられる．たとえば ni-nik-ta（√nij「洗う」）と同様に，√hu は *jʰu-jʰu- > ju-hu- のように u 重複を行うようになったと考えられる．i 重複と a 重複は本来のものである[5].

4.2 アクセント

第 III 類のアクセントの型には次の三種類がある．

前後移動型　bí-bhar-mi / bi-bhr̥-másі (√bhr̥).

後方移動型　ju-hó-mi / ju-hu-más (√hu).

固定型　já-hā-ti (√hā [1]) / jí-hī-te (√hā [2]).

後方移動型の ju-hó-ti, yu-yó-ti のアクセントは第 V 類の su-nó-ti（√su「搾り出す」）などからの類推と考えられ，本来は*jú-ho-ti, yú-yo-ti であったと

---

[4] Narten, „Proterodynamischen“, 16–19.

[5] Hill and Frotscher, ‘Accentuation’, 105–106.

考えられる[6]．固定型はもともと同じ語根 √hā に属しており，もともと jáhāti ~ *jihīté という活用体系をもっていたが，jáhāti が能動態のみに，*jihīté が反射態のみに活用するようになると，jáhāti のアクセントはそのまま保たれる一方, *jihīté のアクセントが jíhīte に変わったと考えられる．前後移動型は何らかの類推によると考えることは難しいから本来の型と考えられる[7].

4.3 複語幹仮説と単語幹仮説

以上より第 III 類はもともとアクセントが前後移動型であったと考えられ，重複は i 重複と a 重複の二種類があることがわかる．一般には i 重複音節にはアクセントが置かれず，a 重複音節にはアクセントが置かれると考えられている．語彙によって重複の種類が決まっていると考えた場合，語幹には次の二種類が存在する．

(1) a 重複でアクセント固定型（acrostatic）.

*Cé-Ce/oC- ~ *Cé-CC-

(2) i 重複で後方移動型 (hysterodynamic), 語根・人称語尾間で移動する．

*Ci-Cé/óC- ~ *Ci-CC-´

これは複語幹仮説と呼ばれることがある[8]．アクセントは類推による．

一方で同じ語彙の中で i 重複と a 重複が交替すると考えることもできる．

(3) 前方移動型（proterodynamic）.

*Cé-Ce/oC- ~ *Ci-Cé/óC-

(4) 前後移動型（amphidynamic）.

---

[6] Hill and Frotscher, ‘Accentuation’, 109.

[7] Hill and Frotscher, ‘Accentuation’, 108–109.

[8] Hill and Frotscher, ‘Accentuation’, 106; *LIV* 16.

表 2 第 III 類のアクセント移動の例と単語幹仮説

語根	意味	単数	1 人称複数	3 人称複数	分詞
√bhr̥	bear	bí-bhar-mi	bi-bhr̥-másі	bí-bhr-ati	bí-bhr-at-
√hū	sacrifice	ju-hó-mi	ju-hu-más	jú-hv-ati	jú-hv-at-
√hā	leave / go forth	já-hā-ti		jí-hī-te (Ā)	
√CeC	(PIE)	*Cé-Ce/oC-mi	*Ci-CC-més(i)	*Cé-CC-n̥ti	*Cé-CC-n̥t-

*Cé-Ce/oC- ~ *Ci-CC-´

これは単語幹仮説と呼ばれることがある．前後移動型の場合，アクセントは保たれたままそれぞれの語彙で重複の種類がどちらかに統一されたことになる．単語幹仮説の前後移動型を採れば，第 III 類のアクセントと語幹は表 2 のようになる[9].

3 人称複数形のアクセントと語幹が特殊になる理由は不明だが，人称語尾が分詞の複数主格形に由来するため，と考えられることもある[10].

5　datte のアクセント

Macdonell, *Vedic Grammar for Students*, ‘List of Verbs’, s.v. dā- (1) には ‘dátte’ とあり（p. 388），Whitney, *Roots*, s.v. dā- (1) にも ‘dátte’ とある（p. 71）．ただし Macdonell, *Vedic Grammar*, §458 (pp. 341–342) には正しく ‘datté’ とある．

Gotō, *Morphology*, §3.4.2.4 (pp. 103–104) には，第 III 類の本来の母音交替・アクセントの型と考えられる ‘amphidynamic’ (p. 8, 仮に「前後移動型」

---

[9] Hill and Frotscher, ‘Accentuation’, 114.

[10] Kortlandt, ‘Accent’, 5; ‘Patterns’, 222.

表 3　第 III 類の母音交替とアクセントの型

		√bhr̥	√dā	√dhā	√hu	√hā	√śā
		‘bear’	‘give’	‘put’	‘sacrifice’	‘leave’	‘sharpen’
P 3 sg.	Á-B-C	bíbharti	dádāti	dádhāti	*juhóti*	jáhāti	śíśāti
P 3 pl.	Á-B-C	bíbhrati	dádati	dádhati	júhvati	jáhati	
Ā 3 sg.	A-B-Ć	bibhr̥té	datté	dhatté	juhuté	*jíhīte*	*śíśīte*
Ā 3 pl.	Á-B-C	bíbhrate			júhvate	jíhate	

と訳す）しか書かれていないが，すでにヴェーダ文献にはほかの型が見られるので，表 3 で整理する．まず，前後移動型のアクセントの位置が本来のアクセントの位置と考えられるので，左に A-B-C（重複音節－語根－人称語尾）で示した．次に前後移動型に含まれる √bhr̥ ‘to bear’, √dā ‘to give', √dhā ‘to put’ のそれぞれのアクセントと形態を示した．√hu ‘to sacrifice’; 1. √hā ‘to leave (tr.)’ [~ 2. √hā ‘to go forth’], √śā ‘to sharpen’ は前後移動型と異なるので，アクセントが異なる形態のみイタリックで示した．

これらを分類すると次のようになる[11]．

(1) 前後移動型（amphidynamic）：bíbharti ~ bibhr̥másí (bíbhrati [3 pl.]).

(2) 後部移動型（hysterodynamic）：juhóti ~ juhumás (júhvati [3 pl.]).

(3)（重複音節）固定型（static）：jáhāti ~ jíhīte (1. √hā ~ 2. √hā).

後部移動型（juhóti 型）には，ほかには √yu ‘to separate’ (yuyóti) などが含まれる．重複音節固定型（jíhīte 型）には，ほかには √mā ‘to measure’ (mímīte) などが含まれる．

6　前後移動型の例外

[11] Hill and Frotscher, ‘Accentuation’, 107.

『リグ・ヴェーダ』や『アタルヴァ・ヴェーダ』では本来の前後移動型のアクセントを保っているが，後代のヴェーダ文献になると，それとは異なったアクセントをもっていることがある（イタリックで表した）[12]．これは刷新（innovation）であると考えられる[13]．

(a) TSのマントラ部分ではbíbharṣiであるのに対し，散文部分は*bibhárti*.

(b) VS には *bibhárti*, *bibhárṣi* が現れる．前者は AV と同じマントラだが，AV では bíbharti.

(c) ŚB には，Ṛ̊V や VS とは関係のない箇所で *bibhárti* が現れる．

凡例

(: A)	A は語根.
B ~ D	B と D で交替する.
***E**	E は想定形.
†F	F という形態は誤り.
G > H	G は H に変化.
K < L	K は L に由来.
***ṇ̊**	印欧祖語の母音化した *n.
C	Consonant（子音）.
LIV	Rix (Hg.), *Lexikon der indogermanischen Verben*².
VGS	Macdonell, *Vedic Grammar for Students*.

ヴェーダ文献の略号

AV	Atharvaveda.	**MS**	Maitrāyaṇī Saṃhitā.
Ṛ̊V	Ṛgveda(-Saṃhitā).	**ŚB**	Śatapatha-Brāhmaṇa.

---

[12] Hill and Frotscher, ‘Accentuation’, 110.

[13] 本ノートの第 1–4 節は 2015 年 5 月 18 日の梶原三恵子先生の「印度語学印度文学演習(1)」（東京大学文学部），第 5–6 節は 2022 年 5 月 9 日の「印度語学印度文学演習 III」での発表資料をほぼそのまま掲載したものである．

TS Taittirīya-Saṃhitā. **VS** Vājasaneyi-Saṃhitā.

参考文献

Beekes, R. S. P., *Comparative Indo-European Linguistics: An Introduction*[2] (Amsterdam: John Benjamins, 2011).

Gotō, T., *Old Indo-Aryan Morphology and its Indo-Iranian Background* (Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2013).

Hill, E. and Frotscher, M., 'The Accentuation of Old Indic Reduplicated (3rd Class) Presents', in H. C. Melchert (ed.), *The Indo-European Verb: Proceedings of the Conference of the Society for Indo-European Studies, Los Angeles 13–15 September 2010* (Wiesbaden: Reichert, 2012), 104–114.

Kortlandt, F., 'Archaic Ablaut Patterns in the Vedic Verb', in G. Cardona and N. H. Zide (eds), *Festschrift for Henry Hoenigswald: On the Occasion of his Seventieth Birthday* (Tübingen: Gunter Narr, 1987), 219–223.

——— 'Accent and Ablaut in the Vedic Verb' (1999). `http://www.kortlandt.nl/publications/art188e.pdf`

Macdonell, A. A., *Vedic Grammar* (Strassburg: Trübner, 1910).

——— *Vedic Grammar for Students* (Oxford: Clarendon Press, 1916).

Narten, J., „ Zum ‚Proterodynamischen' Wurzelpräsens", in J. C. Heesterman, G. H. Schokker and V. I. Subramoniam (eds), *Pratidānam: Indian, Iranian and Indo-European Studies Presented to Franciscus Bernardus Jacobus Kuiper on his Sixtieth Birthday* (The Hague: Mouton, 1968), 9–19.

Oettinger, N., „Bedeutung und Herkunft von altindisch jíhīte (Wurzel hā)", *Historische Sprachforschung*, 120 (2007), 115–127.

Rix, H. (Hg.), *Lexikon der indogermanischen Verben*[2] (Wiesbaden: Reichert, 2001).

von Schroeder, L. (Hg.), *Maitrâyaṇî Saṁhitâ* (Leipzig: Brockhaus, 1881–86).

Whitney, W. D., *The Roots, Verb-forms and Primary Derivatives of the Sanskrit Language* (Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1885).